九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マシュー・アーノルドにおけるデモクラシーと教養

清瀧, 仁志
日本学術振興会特別研究員

https://doi.org/10.15017/16388

出版情報：政治研究. 49, pp.73-115, 2002-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

マシュー・アーノルドにおけるデモクラシーと教養

清瀧仁志

はじめに
一　マシューにおけるデモクラシーの位置
二　イギリスにおけるデモクラシー
三　マシューの「ミル主義」批判
四　教育制度改革をめぐる論争
五　マシューの「マイアル主義」批判
おわりに

はじめに

本稿における分析は、マシュー・アーノルド（一八二二-一八八八）の『教養と無秩序（*Culture and Anarchy*）』をはじめとする社会評論における関心が何であったかという問いから出発する。この解明によってめざすものは、彼の主著の一つ『教養と無秩序』を、抽象的な教養論として理解するにとどまることなく、その叙述の背景にある彼の同時代的関心をとらえなおし、デモクラシーの時代を不可避的に迎えようとしているイギリスにおいて、マシューがいかなる教訓を提言しようとしているか、という問題の検討である。この観点からの探求は、イギリスの政治状況に関する彼の問題関心を十分配慮しながら進めていかねばならないことはいうまでもない。

本稿においてとくに強調しておきたいのは、マシューが政治的実践に強い関心を持っていたことである。彼は詩人である一方で、勅任視学官として主として大陸の教育行政に関する報告書を数多く執筆している。[1] レイモンド・ウイリアムズが指摘しているように、マシューは理論的著作においてあいまいと批判される原理を教育問題では細目に適用している。その意味で、『教養と無秩序』は報告書や教育論文などと一緒に読まれる必要がある。[2] この観点から『教養と無秩序』以外の著作にも積極的に目を向けることによって、マシューの主張を同時代の政治状況と関連付けつつ、政治的に有意味な議論として解釈する方法を採用する。[3]

とくに注目しているのは、大陸における教育事情を調査した報告書である『フランスの民衆教育（*Popular Education in France*）』（一八六一年）の序文にある「デモクラシー（Democracy）」という小論である。これは、改めて報告書と独立した論文として一八七九年に出された彼の『評論集（*Mixed Essays*）』に収められている。この文献は、後に検討するようにマシューが抱いていた政治的課題と教育行政との関係を端的に知ることができるものといえる。

マシューは、この小論の趣旨を「国家活動はかつて危険をもたらすものであったが、現代ではそれ自体危険なもの

でなく、別の方向からの危険に対して我々を守る手段である」(2) と述べる。一般にこのマシューの主張は、『教養と無秩序』とあわせて、国家干渉に否定的な世論を批判し、国家活動を積極的に容認したコレクティヴィズム的主張として解釈されている。たとえば、バーカーはマシューの議論を「代議政治を否定する権威主義」として位置づけ、教養によって完成された最善の自我を代表する権威による支配を理想としていたと解釈する。[4] また彼の国家干渉主義に対する自由主義的観点からの批判は、同時代においてすでに存在していた。

二〇世紀になると、国家干渉を容認する「ロマン主義」的議論が評価を下げていく中で、マシューの政治思想に対する評価は、イギリスの階級社会を描写した「野蛮人 (Barbarians)」「俗物 (Philistines)」「大衆 (Populace もしくは Masses)」の三類型の分析やそれにともなう「教養 (Culture)」概念を抽象的に論じる方向をたどっていくことになる。マシューが設定した三類型は、階級社会イギリスを的確に指摘したものとして評価されても、同時代の政治状況とそれに対するマシューの問題意識と具体的に結びつけて理解されることはあまりなかった。[5]

この小論を本稿でとくに注目するのは、当時の政治現象、とくにデモクラシーに対する彼の関心が顕著にあらわれているからである。国家活動に対する彼の積極的支持は、彼にとってはデモクラシーへの一つの対応である。デモクラシーと切り離して、その「ロマン主義」的な国家干渉主義に限定して彼の政治思想を論じるだけでは、彼の問題関心の本質を正確にとらえることにはならないであろう。マシューの時代(一八六〇年代)、イギリスにおけるデモクラシー化は不可避と考えられていた。それはイギリス一国ではなく、ヨーロッパ全体の政治的潮流としてとらえられていた。この認識は、マシューの父トマス・アーノルドにも共有されていた。一九世紀半ばに生きたマシューの場合、さらにデモクラシーを積極的に容認し、それを人間の進歩のあらわれと見ていた。結論を先取りしていえば、彼が当時の政治状況において懸念していたのは、来たるべきデモクラシー社会の内容であった。彼は、このデモクラシー社会がトクヴィル描くところのアメリカ的なデモクラシー社会となることを懸念していた。彼にいわせるならば、それ

はイギリス社会の「アメリカ化」であった。いいかえるならば、アングロ・サクソン的な中産階級の文化がデモクラシーを動かす精神的主導力となる状況であった。その文化は、自由放任原理の下で社会的に拡大していく。マシューのとなえた国家干渉は、それを防ぐための手段であった。以下では、「デモクラシー」におけるマシューの議論を中心において、デモクラシー化とそれにともなう課題に対する彼の認識を考察する。

〔文献略記号〕

本稿での引用について、Arnold.M, *Culture and Anarchy and other Writing* (Cambridge, 1993) からのものについては、頁数だけを標記。

またSuper .R.H. ed, *The Complete Prose Works of Matthew Arnold*, 11vols (Michigan, 1960-77) については、Super と略記。

一　マシューにおけるデモクラシーの位置

マシューの政治的議論をとらえる上で、第一に理解しなくてはならないのは、デモクラシーを歴史的に不可避なものとして認識していることである。同時代において「一六八八年の革命以来、この国を統治してきた旧来の政治的党派の終焉が明らかになって久しく」(2)、アリストクラシー的党派の没落は不可避である。彼は、時代の変化をアリストクラシーからデモクラシーの変化としてとらえている。

彼は、貴族を「名門の家系・領地もしくは宮廷の寵愛、またはすぐれた能力や人気（この場合、他の要素を通じて公務に参加できる）で結びついた者」として定義する。彼によれば、この貴族階級はそれぞれ出生、財産、政治的意見、活動を異にしているが、上流階級特有の考えや習慣によって、混合され、共通の教養（common culture）によっ

て結びついている。

マシューは、アリストクラシーの没落を指摘したが、ベンサム主義者のようにアリストクラシーのエートス全体を寡頭政支配の象徴として排除するわけではなかった。父トマス同様、イギリスにおける貴族の伝統的教養が果たしてきた役割を肯定的に評価している。彼は、偉大な気品（the grand style）を持つ貴族の徳を次のように評している。

「崇高な品格、すなわち高貴な考えや行動は、ある者に自然に備わったすばらしい賜物である。この品格は、貴族が持つ権力によって、その高貴な地位にともなう重要性やそれに対する責任感によって、また大事に取り組む習慣、日常の些事にかかずらう必要のないことによって、その階級全体に植えつけられる。」（3-4）

彼は、貴族の徳性が古代ローマにおけると同様、イギリス国民を感化し、偉大なものにし、気品を身につけさせることに役立ってきたとする。

さらに政治支配においてもイギリス貴族階級は、他の国にまして卓越していた。バークを思わせる調子でマシューは、イギリス貴族の政治的能力をたたえる。

「「イギリスの」貴族政は、たぶんどの貴族政にもまして一般国民の共感を得ていた。それは、国民に不快感を与えることがほとんどなかった。軽蔑されるような浅薄なものでなく、苛立ちを生むような無礼さがない。それにもまして、自分たちの概念にしたがってのことだが、一般に正義にのっとってふるまっていた。それゆえにこの国の国民には貴族階級を賞賛し、彼らに信従する感情が、心の底から、しかもずっと長い間、大陸のどの国にもまして深く根付いていた」。（9-10）

彼は、イギリスにおけるアリストクラシーを大陸諸国のそれと比べて、はるかに卓越した存在としてみている。すく

なくともこのすぐれたアリストクラシーが、一九世紀前半までこの国の政治的・社会的安定に貢献した。彼は、このイギリスにおけるアリストクラシーを「歴史に記録された中で最も価値があり、成功したもの」(11)とさえ評している。

しかし、現在、イギリス国民の貴族に対する信従の念は消え去りつつあり、その政治的支配は動揺しつつある。貴族は、統治権を保持していてもその国民全体における指導的地位を失いつつあった。その一因として、過去、国民を信従に導いてきたアリストクラシーの卓越した教養の衰退をマシューは挙げる。彼は、イギリスのアリストクラシーの統治が直接の政治的権力でなく、教養による知的支配によるところが大きいと考えていた。国家におけるアリストクラシーの指導的地位は、国民がその精神的な優越性を認めなくなった現在、終焉に向かいつつあった。『教養と無秩序』で「野蛮人」として描いているのは、まさにその教養を失いつつある貴族の現状である。

だが、マシューの政治的議論は、伝統的な人文主義的徳論にとどまらなかった。アリストクラシーの没落が、貴族における徳の復活で解決できる問題であると彼は考えなかった。彼は、アリストクラシーの没落を「自然で不可避なる原因」に求める。デモクラシーの精神が国民に浸透していったことによって、アリストクラシーは正義に著しく反するものとみられるようになったのである。それは、「収斂の時代」から「発展の時代」の変化の中での一つの現象である。

一九世紀のイギリス社会全体における変化として、当時の政治思想家がとくに注目したのは、産業化と階級対立であろう。いうまでもなくロンドンに滞在していたマルクスがその代表的存在であるが、マシューに関わりのある者として父トマスやカーライルも、この二つの要因を同時代の政治的変化をもたらす重要なものとして、その分析の対象としている。マシューの時期は、すでに産業化の完成の時期にあり、彼が重要視したのは後者の階級対立である。

マシューは、階級対立をもたらした起源を産業化よりも、同時代の政治的潮流に求めた。その起点はフランス大革

命であった。産業化は、その潮流を促進する要因にすぎない。彼は、ヨーロッパの政治状況におけるフランス大革命の歴史的影響を重要視し、それが一九世紀の政治全体の方向を位置づけてきたとする。イギリスにおける階級対立はそれがもたらした一つの現象としてとらえられる。彼によれば、大革命は新しい種類の社会の、不可避的到来をつげるものである。この新しい社会はデモクラシー社会であり、彼の政治的関心の中心にあった。この新しい社会で人々は社会的平等を求め、貴族の優越的地位をもはや認めなくなっていた。

このような社会変化に対する彼の認識を念頭において、マシューの著作をながめるならば、そこにおける貴族と中産階級の対照が、政治的に鮮明となってくるであろう。『教養と無秩序』は、イギリスにおけるアリストクラシーからデモクラシーへの移行過程における諸階級の類型的描写である。この著書の記述がいささか散漫で政治的課題との関連がわかりにくいのに対し、「デモクラシー」は、諸階級の類型とデモクラシーとの関連を凝縮して表現したものといえる。彼はイギリスの教育問題を論じるにあたって、デモクラシーの移行過程における社会的変化とそれが不可欠であることを指摘するために、大陸視察としての情勢報告の本論に先だって「デモクラシー」を執筆したと理解できる。

マシューが考察するデモクラシーのモデルは、決して抽象的でなく、その考察は具体的な事例にもとづいたものである。その事例とは、大革命以後のフランスとアメリカ合衆国である。前者については、長期間における視察旅行で実際にその社会を経験し、後者については、トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』を情報源とする。後に彼自身、アメリカ社会を訪問することになるが、すでにその時は、自らの視点を確認し、以前の主張を繰り返すにとどまっている。この二つの国は、デモクラシー社会の実例として比較考察の対象であるだけでなく、マシューにとっては、イギリス社会の発展形態の相異なるモデルとして、予見可能な未来を示すのである。イギリスは産業化において他国に先んじたが、この社会変化には遅れをとっている。その変化は急速に訪れようとし、望ましからざる発展をもたらすのではないかと、マシューは危惧する。現在のイギリス社会の諸階級に対する描写は、その懸念に満ちた考察の反映

であり、中産階級に対する執拗な警告となってあらわれている。

マシューは、J・S・ミルに代表される当時の政治理論家のように何らかの有効な理論に照らして、社会変化を検討することはしなかった。彼は理論家でないどころか、同時代のベンサム主義者と呼ばれる人々が、体系化した理論で社会を理解し、機械的にそれを政治改革に適用するのを嫌悪した。マシューは、時代変化によって破壊されつつあった伝統的社会と、新たに確立されつつあった社会に対する鋭敏な観察者であった。時代変化の観察者としてのその研ぎ澄まされた感性は、詩作においてすでにあらわれていた。[6] しかし、このデモクラシー化については、文学的感性でなく、視学官の実務における社会観察と洞察から生まれたものである。また、それは父トマスやその教え子における社会問題に対する関心の高さと無縁ではないであろう。

マシューはデモクラシーを不可避な社会的発展と考える点では、トクヴィルと共通しているが、トクヴィルが法制史家として綿密に土地所有状況を研究して結論を出したのに対し、マシューは人間精神を強調した「ロマン主義」的説明を行っている。彼は、デモクラシーという現象を歴史的発展における「理念（idea）」の作用によるものとしてとらえる。フランス大革命は、この「理念」が噴出した歴史的事件であった。その時代発展は、一八六四年に執筆した『現在における批評の機能について（*The Function of Criticism of the present time*）』において詳細に描写される。フランス大革命は「人間の知性にある原動力」を見出し、「精神的事件」であるがゆえに、力強く世界中に広まる関心を巻き起こした（31）。そして何よりもフランス革命に特徴的なのは、「普遍的かつ確実で恒久的な思想体系に訴える性格」を持つことである。彼はこのことを次のように説いている。

「フランス大革命は、理念の持つ力、真実、普遍性をその法とし、大衆の中にこうした理念に対する情熱を湧き上がらせるものであった。そしてそのことによって、フランス革命は他にはない、永続する力を持った。

それは史上最大の、そして最も人の心を打つ事件であった。おそらくこれからも長くそうあり続けるであろう。精神に関わる事物に寄せられた真摯な情熱は、たとえそれが多くの点で不幸な情熱であったという結果になるにしても、まったく捨てられて試みられもせず、何一つよい結果をうみもしないということには決してならぬものだ。フランスも、その情熱から一つの果実を我が物とした—それははじめ期待したごときすばらしいものではないが当然の理にかなった一つの果実である—。フランスは、ヨーロッパを通じて最も活気ある国民を持つ国となったのである。」(32)

フランス大革命にあらわれた「理念」は、その思想のすべてを一気呵成に政治と実践の世界に応用し、暴力的に政治変革に向かおうとして反動を招き、一度は「収斂」を余儀なくされる。その状況をマシューは、次のように描いている。

「他の国民が自分の新しく発見した正義にのぼせ上がって、それを我々にも押しつけ、力づくで我々の支配に彼らの正義を取って代わらせようとするならば、それは専横の振舞いであり、抵抗すべき行為である。それは、あの格言〈正義が来たるまでは力が〉という部分を黙殺する行為である。フランス革命の大きな過ちがここにあった。その思想の変動は、知性の世界を離れて、猛然と政治の世界に突入し、そのことによって確かに巨大な、記憶すべき道を進んだ。だが、そこからはかつてルネサンスの思想の変動に見られたごとき、知性の果実は実らなかった。それに反逆するものとして「収斂の時代」を生み出したのである。」(33)

イギリスのアリストクラシーは、当時、政治的実践においてフランスの「理念」にまさっており、ナポレオン戦争に勝利した。その後、ヨーロッパは「収斂の時代」を迎える。「収斂の時代」は、イギリスのアリストクラシーが支配的地位を維持する時代であった。

マシューによれば、エドマンド・バークはこの「収斂の時代」における偉大な著述家である。彼の偉大さは、トーリーやホイッグの党派精神から離れ、「理念の世界」に住んでいたことにある。バークは政治における「理念」の役割

を理解していたイギリス人であった。マシューは、「フランスの事件について」（一七九一年一二月）における次のバークのことばを「イギリスにおける著述作品の中で最も美しいことばの一つ」(35) と評している。

「もしもこの世の中に何か大きな変化が起こるべきものとすれば、人々の精神もそれに適応するように変わっていくことであろう。一般の意見や感情は、その方向へ動いていくであろう。またすべての危惧、すべての希望が、その変化を進めていくであろう。そしてそのとき、世の中のこの力強い流れに逆らいつづける人々は、もはや単なる人間の意図に反抗しているのではなく、摂理そのものにあらがっているのである。彼らは、もはや確固とした決意の人などというものではない。彼らはひねくれた頑固者にすぎないのである。」(34)

バークのことばのように、フランス大革命の「理念」は、ヨーロッパ諸国で確実に影響を強めていき、やがて「理念」が時代の潮流となる「発展の時代」をもたらすことになる。現在は、この「発展の時代」であり、「宗教、政治、社会的自由の理念」は、デモクラシー社会を不可避にする。このデモクラシーの到来では、革命の発祥の地であるフランスは他国に先んじていており、マシューはその状況を次のように指摘する。

「ヨーロッパで力を増しているのは、デモクラシーである。フランスは、デモクラシーを文句なく偉大なものとして、成功に導くようにつくりあげた。一七八九年の理念は、一八世紀において、いたるところで働いていた。それは、フランスがその理念に適合していたからである。フランスは大陸のデモクラシーにおける希望の星となった。フランス人の優越感や傲慢ともいえる自負は、自分が力を持っているという意識ゆえであり、その意識はデモクラシー化に先駆けているという事実に由来している。」(8)

現代から振り返ってみると、イギリス帝国の絶頂は一八七〇年ごろであり、当時、すでに後発国のめざましい発展

による脅威を受けていた。マシューはこの帝国の衰退を意識していた数少ないイギリスの知識人であり、その衰退の原因を「理念」の時代に対するイギリスの鈍感さとしてとらえていた。それは、すぐれたアリストクラシーを持っていたがゆえの逆説であり、アリストクラシーがすぐれた政治的能力を発揮して健在であることが、デモクラシーが支配的な「発展の時代」に乗り遅れることにつながった。

マシューは、イギリスのアリストクラシーがこの「理念」に関心が薄かったことを指摘する。それは、貴族の持つ精神的傾向によるものである。このことは、イギリスの伝統的外交を批判した一八五九年の論文「イギリスとイタリア問題（England and the Italian Question）」で詳細に論じられている。これはマシューが最初に政治問題について自分の意見を公にした著作であった。マシューはこの中で、イタリア統一運動にみられる大陸の政治運動について、イギリスのアリストクラシーが無関心であることを批判している。彼によれば、政治的実践にすぐれた貴族は、既成秩序に多大な尊敬を払う一方で、「理念」の民衆に対する影響に対してほとんど個人的経験を持っていない。また「理念」が抽象的であり、既存の秩序と全く異なっているゆえに、「理念」に対して共感を抱いていないとする（Super, I, p.83）。この貴族の精神的傾向のために、アリストクラシー支配が続いてきたイギリスでは、「発展の時代」に取り残されてきた。アリストクラシーが「発展の時代」と相容れない存在であることを彼はこのように説明する。

> 「理念に対して共感を抱いていない貴族は、社会の形成期、すなわち力や確信に満ち、活動的な資質が理念より重要である時代においては、最も成功を収めてきた。だが、彼らは、文明が進化した時期には適応しなくなる。それは、複雑になった社会が登場し、理念の理解と適用を余儀なくされた時代でもある。」（Super, I, p.84）[7]

それは、ローマのアリストクラシーが、またベネチアやフランスのアリストクラシーがたどった衰退と同様の現象で

ある。「理念」を重要視する時代にあって、既成秩序に固執し、個別的・経験的思考に立つ貴族はもはや時代遅れであった。イギリスの「アリストクラシーは政治的であり、妥協にすぐれていた」が、その思考は「理念」重視の新しい時代に適合的できなくなっていた。彼は『現代における批評の機能について』で、イギリス人〜この場合は政治を支配してきた貴族エリートと解するべきであろう〜の思考の停滞をこう指摘する。

「イギリス人は政治的動物であるといわれる。イギリス人は政治的なこと、実践的なことを高く評価するあまり、理念はとかく彼の目に厭うべきものと映り、思想家は〈ならず者〉と見えてくるのである。つまり、思想や思想家は、いつも政治と実務に無鉄砲な手出しをするから、というのだ。もしそうした毛嫌いなり軽蔑なりが本来の世界を逸脱して実務に無鉄砲な手出しをする理念のみに向けられるなら、至極結構な話である。だが、それは必ず、理念そのものに、あらゆる知的生活そのものに向けられるに至る。実務が一切である、精神の自由な働きなどは何物でもない、と」(35)

マシューは、「デモクラシー」でこの「理念」を精神の自由な働きを求める人間本性と結びつけている。アリストクラシーの没落は、この自由な働きに関心を向けなかったことに起因する。他方で「理念」に立脚するデモクラシーは、この人間本性に根ざした政治現象である。彼は、デモクラシーの精神を批判する者が人間本性に対して不満を抱くのと同様であるとまで断言する(5)。この関係を彼は次のように説明している。

「生とは哲学者がいうように〈自分の本質を確かなものにさせる〉努力の中にある。これが意味するのは、自身の存在を十分かつ自由に発展させることである。またそれは、壮大な叡智と気風を持つことであり、束縛を受け、存在を希薄にさせることではない。デモクラシーは〈自分の本質を確かなものとする〉ことである。それは貴族がかつてそうであったように、この世で生き、楽しみ、所有することである。

ヨーロッパが野蛮から抜け出し、一般民衆の状況が少しずつ発展し、彼らの精神が高揚し始め、デモクラシーに向う努力は力を強め

てきた。彼らの状況が進歩するにしたがって、その努力は強力になってきた。生そのものとそれが発展することに魅力が増していくにつれて、デモクラシーへの努力が渇望されるようになるのである。」(5)

イギリス貴族の指導的地位に対する国民の信従は、この一般的・普遍的理念の前に基盤を揺るがされ、アリストクラシーの支配は終焉に向かっていった。

マシューは、デモクラシーにおける社会的平等を人間本性の発展と結びつける。両者の連関について、彼は次々に問いを発する。「平等への確実な接近—少なくとも大きな不平等を確実になくしていくこと—が、人間本性にもとづく本能的な衝動であり、それは社会全体—それはもはや個人や限られた階級でなく、大衆の集合体である—をできるかぎり豊かに、そして自由の方向に向かわせるということは、否定できないのではないだろうか?」「平等な社会に暮らすことは一般に人間の精神を拡大し、その才能を活性化することを促すのではなかろうか?」「上流社会に暮らすことは、時にはすばらしい訓練であろうが、一般にそれは精神を萎えさせ、しっかりと活発に能力を発揮することをできなくさせることを否定できないのでは?」また「人間が見劣りした地位でとるにたりない立場にあることが個人の性格を沈滞させ、麻痺させる影響をもたらすのではなかろうか?」(8)と。彼は人間の特性として、「貴族の義務 noblesse oblige」にみられるように、高き地位を自覚することで自分がそれに値するようにこころがけるものである、とする(11)。すべての者の地位を高めるデモクラシーは社会全体の徳性を高めることになろう。そして、一般民衆が自分の運命を決めるのにより積極的な役割を果たすようになるにつれ、貴族は統治の指導者の地位を脅かされるという。それは民衆の精神や特性に及ぼしてきた彼らの影響を失うことである(12)。

マシューは、このようにデモクラシーを人間本性の発展にとって不可欠なものとみている。そして、デモクラシーに対応させて社会制度を組み立てたフランスこそ、社会のすべての者が十分かつ自由に発展を遂げることができる社

会とみる。そこでは「理念」の作用が働いている。社会は慣習から理性に、事実から権利にもとづいたものと変わる。伝統的地位にもとづいて人間関係が構築されるイギリス社会と異なり、フランス社会は普遍的・一般的な人間本性の原理によって構築されている。ヨーロッパ諸国は現在、フランスの影響を受け、その制度を模範として政治的改革をめざしているのである（8）。

マシューは、そのフランス社会の状況を文明（civilization）が発展しているとして評価している。イギリスの国力の発展にともなって、その興隆を文明の発展としてとらえる見方は当時の歴史解釈において支配的であった。人文主義的な知的伝統からその発展を古代ローマの隆盛に重ね合わせる見方はなじみ深いものであったが、この時期の文明観は進歩史観と結びつき、歴史発展を直線的に理解する見方が有力であった。それは啓蒙主義的進歩史観にもとづき、人間本性の発展と文明の発展を連動させる視点である。

マシューは文明の本質を、人間の自己発展と連関させてとらえる。この文明観をみることによって、彼におけるデモクラシーと人間の自己発展の関係がさらに明確となろう。それは、後の論文である「平等（equality）」（一八七八年）において詳細に語られる。そこで彼は文明を「社会における人間の洗練（humanization）」と定義している（221）。人間が洗練されるとは、「人間本性における真の法―自己の限度を守り、目的に進みつづけ、その本性に従う―を受け入れる」ことである。さらに文明化とは、人間本性が社会単位で発展することにある。個人の洗練と社会の文明化は、対応しているものであり、マシューはバークのことばを引用し、文明社会がなければ、人間の本性によって到達できる完成にたどりつくことも近づくこともできない、という（221）。それは、個人としての人間がいくら洗練されていても社会全体の文明化がともなわなければ、人間が完成に近づいた理想的状態に至らないということである。それゆえに最も文明化された国民は、人間の完成に最も近いところに来ている国民であり、完全ということが真に期待される状況にある（221）。マシューはこの文明化にフランス国民が近づいていることを否定していない。

洗練性(humanisation)の規準として、マシューが最も重要な要素としているのは、社会生活とその習慣(social life and manners)の能力である(223)。フランスにおいてこの能力は、アテナィ以上に発達しているという。ヴォルテールがいうルイ一四世の世紀における社交の精神(l'esprit de société)は一般化され、国民全体に定着している。旧体制におけるフランスの貴族は、高尚で魅力的な社会的交際と作法に関する理想をつくりだし、国民はそれによる恩恵を受けている(223)という。この社会習慣の定着は社会的平等状態の推進力であり、作法の洗練は人間を平等にするとして、マシューは次のように論じている。

「人間に共通した作法を持っている社会は平等な社会であり、社会的に不平等な状態ではそれは意味がない。そこでは社会全体にわたって交流が容易であることが人々に脅威をもたらし、人々を困惑させる。したがって社交の精神を持った社会は、明らかに平等の精神を持った社会である。社交の智慧を持つ国民―フランス、アテナイ―は必然的に平等に引きつけられている。フランス国民は、社会的交際と作法の能力について、共通した認識を持った最初から平等の道を歩み出したのである。」(223)

彼は、さらにフランス人における社交の精神が大革命の推進力となったとして説明を続ける。

「フランス人において、社交の習慣についての高尚な基準をつくりあげると、階級や財産についての封建的不平等がもはや力を失うことは、自然かつ物理的にも必然なことであった。そこでフランス国民は平等を受け入れ、革命を実行したのである。フランスを革命に追いやった主な原因は、博愛精神でも、ねたみの精神でも、抽象的理念に対する愛でもなかった。これらは革命に対し何らかの貢献をなしたが、その中心は社交の精神であった。」(224)

マシューはフランスでは無学な小農においてすら、知性に満ち、作法にすぐれているとする。フランスの民衆は、人

問的な生活、洗練された者の生活を謳歌しているという（225）。

マシューは「デモクラシー」において、デモクラシーによる社会的平等によって上流階級が持っていた自尊心、偉大な精神、祖国の活動に加わっているとの意識が一般民衆に広がり、彼らをフランス国民の中のもっともすぐれた部分にしているという（7）。マシューは文明化を一般国民の洗練性に求め、社会的平等によってそれが全体に普及しているフランスを「文明社会」とみている[8]。この視点によって文明化とデモクラシーの両者は結びつくのである。

他方で、デモクラシー化の遅れているイギリスは文明化に遅れをとっているといえる。産業化にさきがけ、未曾有の発展を遂げていたイギリス国民にとって、それは意外な指摘でもあった。マシューは、トクヴィルのことばを次のように引用する。

「哲学的観察者（＝トクヴィル）は、デモクラシーに対して何の愛着も持たず、むしろそれを恐れていたが、次のように言わざるを得なかった。〈アリストクラシー的な国家での一般民衆は、他国に比べて、洗練されていない。〉それは、〈貧しく低い地位の者は自分の劣った立場ゆえに圧迫されていると感じているゆえである。〉そしてさらには、次のように書かざるを得なかった。〈すべての者が権力と尊敬を受けることを求めるような刺激を与える、平等に対する高潔で正当な情念は存在するのである〉」（6-7）

イギリスにおいて、アリストクラシーは魅力的な徳性を持っていながらも、社会的不平等ゆえにその徳性は階級内にとどまり、イギリス国民全体としての洗練性に欠ける。そこにはフランスのような国民全体に広がった社交の習慣はない。一般国民が洗練されていないというイギリスの状況は、デモクラシーが不可避になっている状況において、他国に遅れをとる原因となるのである。

二　イギリスにおけるデモクラシー

ここまでの議論ではマシューにおいてデモクラシーとは、政治体制というよりも社会状態としての平等を総称する概念として主に用いられていた。彼は当時、さかんに論じられてきた議会制度に関する諸問題についてほとんど議論していない。[9] ダイシーは、当時のイギリスにおけるデモクラシーについての議論を、古典古代以来の政体としてデモクラシーを理解する傾向と社会的平等状態として理解する傾向の二つに分けたが、[10] マシューは後者にあたるであろう。トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』も彼はこの視点から読んでいる。トクヴィルがデモクラシー社会における国民の習俗に焦点をあてたように、マシューは、社会的平等状態と国民の社会的生活とその習慣との関連に着目していた。フランスのデモクラシー社会において、その両者はともに発展し、国民の洗練といえる状況をつくり出した。他方、イギリスでは、アリストクラシーの長期にわたる支配において、両者とも発展は不十分である。マシューがデモクラシーの政治的潮流に直面するイギリスで問題としたのは、政治体制としてのデモクラシーが進展する反面で、社会的平等と国民の精神がそれに見合って進展していない現状である。それは、J・S・ミルのことばを借りるならば「政治における平等」と「社会における平等」が一致しないということである。イギリスでは一八三二年の第一次選挙法改正以来、「政治における平等」は、漸次拡大しつつあり、労働者階級の政治的権利の主張も無視できなくなった一方で、「社会における不平等」は産業化の進展によってむしろ広がりつつある。彼によれば、イギリス社会では「社会における不平等」によって国民の分化が固定化され、デモクラシーが文明に結びつかなくなる。

この問題を論ずるにあたって、マシューが重要視したのは、社会的に不平等な状態にあるイギリス国民の精神状況である。小論「平等」で中心的に論じられている課題はまさにこの国民精神と不平等の関連である。彼が指摘するのは、イギリスが大陸ヨーロッパ諸国と比べると社会的不平等が著しいことである。グラッドストンにみられるように、

政治家は「平等はこの国の民衆にとって魅力的でない」、「イギリスではアリストクラシーが自由よりも魅力的である」とうそぶく状況である（214）。マシューは、平等がフランス国民にとって宗教であるように、不平等はイギリスの民衆にとって宗教であると断じている（215）。彼が憂慮するのは、この社会的不平等がイギリス社会、とくに国民の意識にもたらした影響である。中世封建時代から連綿と続く不平等状態が、一般国民に違和感を覚えさせなくなるほどまで浸透した結果、イギリスでは国民全体が洗練さに欠けるばかりか、各階級における深刻な精神的分化が固定化したのである。

それは、具体的には『教養と無秩序』で描く「野蛮人」「俗物」「大衆」の分化である。不平等状態がもたらす自然のかつ必然的結果として、「我々の現在の状況、すなわち上流階級を物におぼれさせ、中産階級の品位を落とし、下層階級を獣じみたものにさせる」（233）状態が生じる。彼はこれを文明における失敗と評している。そこでは中産階級が、彼らとかけ離れた上流階級の富と奢侈、社会生活と習慣をみて、自分たちの価値観—欠陥を持つ宗教、狭い知性と知識、歪んだ美的感覚、低い水準の習慣—に固執する。さらに、下層階級は上流階級の生活はもとより、中産階級の宗教、思想、美学、習慣にまったく引きつけられることなく、彼ら自身の「ビール、ジン、享楽の世界」に引きこもるのである（236）。

マシューは、社会的平等がそれ自体、完全な文明を与えないとしても、不平等状態は完全な文明を不可能にするという。イギリスでは上流階級と中産階級がそれぞれ保守党、自由党を足場に一方でアリストクラシー、他方で非国教主義を擁護して対立し、文明化の障害となっている（238）。この原因である社会的不平等の状況を改善するため、相続法を大陸並にして、土地貴族が財産を独占する状況を緩和することを主張する（238）。

マシューは、デモクラシーがイギリスにおいて最悪の誤謬をもたらすとするならば、それは予見できなかった新しい事態ゆえでなく、予見できたにもかかわらず誤った方向に進むゆえであると言明する(16)。来たるべきデモクラシー

にそなえるためには、その方向を見極める必要を彼は訴える。「デモクラシー」においてマシューが最も危惧したのは、この階級分化の状況でデモクラシー化が進展することで、中産階級が政治勢力として優勢となり、新しい社会を主導することであった。彼らは、その社会を文明化するには精神的に成熟していなかった。マシューによれば、彼らには国民全体を指導する教養と威厳がなく、今持っている自分たちの理念に対する情熱しか抱いていなかった。その階級的理念—自由と勤勉—は偏狭的であり、高い理性と教養に欠け、たとえ自立し、精力的で成功した国民をもたらしても偉大な国民をもたらすことはない（20）と彼は断ずる。

彼は、中産階級の精神とその性格がデモクラシー社会の嚮導理念となることを「アメリカ化」と位置づけ、そこでは高尚な理念を持ったデモクラシー社会を建設することが困難であると考える。彼によれば、アメリカは社交の精神が形成されないまま、社会的平等の状態に入り、その弊害—とくにセクト主義と物質主義的傾向—を増大させている。それはデモクラシーと文明社会が結びつかない状態である。アメリカのデモクラシーの欠点は、多数者の精神を向上させ、彼らを導く理念をもたずして、多数者が権力を担う危険を有することである。アメリカ的デモクラシーの到来は、イギリスが直面している現実の危険として彼は認識している(15)。とくに当時の自由党による諸改革は、中産階級におけるセクト的主張と物質主義的思考に媚びたものとマシューは考えていた。

このような観点から、マシューが諸著作において繰り返し行っている中産階級の知的習慣に対する批判をみると、それがイギリスのデモクラシー化に対する懸念と連動していることがわかる。デモクラシー化を不可避としながらも、それが政治において危機をもたらすのは、中産階級的な思考および行動様式がデモクラシー社会を指導している状況であった。そこでは社会における高い理念が喪失し、文明に結びつかないデモクラシーに陥る。

マシューによれば、デモクラシー社会ではその社会にふさわしい高い理念を見つけ、それを維持することが難しい。デモクラシー社会の構成員は多数いるが、彼らは理念を打ち立てる者というより、その理念にしたがう者である。イ

ギリスにおいて、アリストクラシーにおける偉大な理念、高尚な感情、洗練された教養は、デモクラシーの政治的潮流の中で時代遅れとなり、失われていった。偉大なデモクラシーを建設するのに必要なのは、多数、自由、活動的である国民が、通常の者よりも高尚な理念によって動かされる状況である。彼はこのように問う。

「我々の社会は、たぶん、さらにデモクラシーが進展する運命にある。いったい何がその国民に高尚な風格を与えるだろうか。それは重要な問題である。」(14)

マシューの『教養と無秩序』における「教養」に関する議論は、新しいデモクラシー社会を構成する国民にふさわしい資質についての考察と考えることができる。それは、「ロマン主義」者マシューの抽象的思索と理解されるべきでなく、デモクラシー化という状況の中で、「野蛮人」「俗物」「大衆」の習俗を超えた精神を求めての彼の知的作業と解されよう。彼が『教養と無秩序』の中で賞賛する「異邦人 (aliens)」は、「教養」によって階級的習俗を超えた理想人として理解すべきであろう。(11) マシューはそれぞれの階級の中に「自分の最善の自我に対する幾人かの人々」がおり、彼らが「想像される以上に社会の中に散在している」と考えている。(12)「教養」は特権を持つ少数者が独占するものでなく、階級の偏見を超えて国民全体に浸透すべきものであった。この視点は、「教養人は平等の真の使徒である」というマシューのことばに象徴されている。

三　マシューの「ミル主義」批判

マシューの政治的議論は、以上みてきたように同時代のデモクラシー化と密接に関係があった。国家による干渉を

積極的にとらえる彼の主張は、この次元において理解する必要がある。それは、当時の中産階級が依拠していた自由主義的政治議論に対抗する主張と理解すべきである。

マシューが批判したのは、中産階級的価値観を反映した当時の自由主義であった。彼は、これを『教養と無秩序』の中で「中産階級の自由主義」と呼び、その要点を「政治では、一八三二年の選挙法改正法案と地方自治、社会的には、自由貿易と制限なき競争および商工業者の財産形成、宗教ではディセンターの不服従とプロテスタント宗教におけるプロテスタント主義」とする(73)。後にマシューは、この中産階級の自由主義を世俗的急進主義と非国教主義という二つの勢力の連合と分析し、それぞれの主張者の名をとって「ミル主義」と「マイアル主義」と呼んでいる。[13] 両者は、それぞれの立場からともに自由放任政策を求めていた。

マシューは、イギリスにおける当時の自由主義をデモクラシー社会にふさわしくないと考えていた。一八六六年の『友情の花園(*Friendship's Garland*)』で、彼はドイツ人アルミニウスの口を借り、それを中産階級の「反精神(Ungeist)」とし、デモクラシーの基礎にあるべき「精神(Geist)」と相容れないものであるという。「精神」の本質とは理性と知性が慣習と偏見に打ち勝つことにあるが、イギリスの自由主義はそれに反しているとする。以下では、マシューによる自由主義批判を具体的に検証することで、デモクラシー社会における高き精神をマシューが具体的にいかに考えていたかを明らかにする。

「ミル主義」とは、J・S・ミルにちなんだことばである。マシューはミルの『自由論』について評価はしながらも、この思想家に共感は抱いていなかった。[14] 彼は「ミル主義」を世俗的急進主義と同じものとして使っている。

『教養と無秩序』で展開しているマシューの世俗的急進主義批判は、三つの観点にまとめることができよう。それは物質主義、「ジャコバン主義」、自由放任に対する批判である。その第一が「機械に対する信仰」としての物質主義に対する批判であった。彼は、その代表的議論として急進的自由主義者ブライトの発言をとりあげる。ブライトは、

イギリス国民に対して次のように演説していると彼は引用する。

「諸君のなしたことをご覧あれ。この国を見渡すと諸君が建設した都市、敷設した鉄道、生産した製品、世界がこれまでに見た最大の商船隊に積まれた船荷をみるであろう。また諸君がその労働によってかつて不毛の地であったこの島を緑多い沃野に変えたのを見る。諸君がこの富を生産したのであり、諸君は全世界いたるところでその名を聞いて恐れぬものはない国民なのである。」(75)

マシューは、そのような考えを俗物的と批判する。それは、自分が何であるかを考えるのに鉄道の数、会堂の大きさをもってし、「優美と叡智」によって自分の進歩を図ることをしない知的態度である。これこそ中産階級の精神を堕落させ、俗物化する思考であるとマシューは断じる。そこには、文明を国民の洗練と考え、その中核にある人間の完全をめざす理想を内面的精神活動におく彼の価値観がみえてくる。それは、歴史上画期的な経済発展とそれにともなう物質的充足を文明と考える同時代の文明観に対する批判でもあった。その文明観は当時、とくに自由主義者の議論の前提となっていた。(15)

さらに第二の問題として、急進主義における「ジャコバン主義(Jacobinism)」的方法を挙げている。ここでいう「ジャコバン主義」とは、カーライルの『フランス革命史』における「ジロンド派」と同様、抽象的な思考体系を合理的社会建設に適用する知的態度の象徴である。それは「過去に対して激しい憤激を抱き」、「革新的な抽象的体系をすべてに適用し」、「合理的社会を細部にわたって完成するために新しい教義を厳格に適用する」という特徴を持つ(76)。後述の教育改革における議論で具体的にみていくように、それは当時のグラッドストン内閣におけるベンサム主義者の政治・行政改革に対する批判につながっていると考えられる。

マシューは、当時の世俗的自由主義の思想体系そのものに批判の目を向ける。ベンサムやコントは独自の思想体系

を持ち、新しい学派を形成したが、その思想体系に自分の狭量と誤謬を持ちこんだ。その思想は、人間の完全をめざす教養の概念と相容れない。マシューは、ベンサムの精神と理念が現代のイギリス社会を革新する役割を果たすという同時代の議論に対し、次のことばを投げかける。

「クセノフォンが歴史を書き、ユークリッドが幾何学を教えていた間に、ソクラテスとプラトンが智慧と道徳を語る口実の下に無意味なことを論じていた。彼らの道徳はことばの上でのことであった。彼らの智慧は皆の経験が知っていることの否定であった」(77)

マシューの唱える教養の精神は「過激」と「抽象的体系」に反対し、「体系の創設者」とその体系を低く評価する(76)。教養を持つ者は、最良の知識とその時代の最良の理念を広がることにつとめる一方で、その「ぎこちなく、粗野で、難しく、抽象的、専門的、排他的な部分」を取り除いて「洗練」させる(79)。ベンサム主義的思考は、この教養ある者の対極にあった。

マシューが世俗的急進主義を批判する最大の点は、「自分の好きなようにすること」、つまり自由放任の尊重である。こうした考え方は、「自分の思うとおりにふるまうことができることが最も幸福であり、重要である」との前提に立ち、個人的自由の名の下に国家の干渉を排除する。この国家活動の排除は各階級の精神的分化とともに、高い理念を持つデモクラシーを構築させることを困難にさせる。現在のイギリスの社会状況は、「野蛮人」「俗物」「大衆」がそれぞれに「自分に好きなようにする」ことを追求し、階級の観念や欲望を超越できない状況にある。各階級の者があるがままの自己を個別的に追求し争う状況では、権力をどの階級の手にもわたさないことが互いの階級にとって安全と考える。国家活動が消極的であるべきという国民的合意は、このような各階級の思惑の反映にすぎない。イギリスの伝統的な分権社会は、この合意を受け入れやすい構造であった。アリストクラシーに対する信従が失われた現在、そこに

は共同体全体をまとめる統合原理はなく、結局、「機械に対する信仰」が全体をつらぬく原理となる。しかし、それは現在、「好きなところで行進し、集会を開き、乱入し、わめき、脅迫し、破壊する権利」を主張する労働者階級によって「無秩序」の危機を招いている（80）。

マシューは国家を「集団的で共同体としての統一性を持った国民」としてみる（83）。彼は、この国家概念を諸著作の中で幾度となく繰り返し用いている。それは彼自身が言明するように、国家を有機体的なものとして、理念を体現する存在としてみるバーク的国家観に立脚していた。彼は、その国家が「一般の利益のために厳格な権力をゆだねられ、個人の意志を個人より広範な利益の名のもとに制限する」ことを認める（83）。その国家に課せられた使命は「社会の正しい理性を集約し、権威をもって国民にそれを発動する」ことである（83）。マシューによれば、イギリスの分権的な政治伝統の下で、それは個人の自由と両立可能であった。

マシューがこのような国家活動に期待したのは、デモクラシーを高い理念に導くことであった。小論「デモクラシー」において、彼はイギリス国民を「アメリカ化」させないために、国家の活動が必要であると論じる（13）。それはかつて国民を精神的に導いてきたアリストクラシーに代わるものである。彼は、デモクラシーを国家活動を排除するアメリカ型と積極的な国家活動をともなうフランス型に分け、後者を支持する。この国家活動として彼が求めたのは、国民の精神的指導に係る部分であった。とくにその活動は、中産階級の偏狭な精神をデモクラシーに適合させることに向けられる。彼は、中産階級に対して国家的活動を受け入れるかどうか、次のような問いを発する。

「これから五〇年は、中産階級によって歴史上決定的な転換が行われるであろう。それは、もし彼らが自分たちが向上するために、国家と手を組もうとしないならば、またもし個人主義的精神を強調しすぎることをやめないならば、またもし政府の活動すべてにねたみを抱くことにこだわるならば、さらにもし過去を嫌い、それを特別扱いすることが時代遅れと学ばねば…（中略）彼らは確実にこの

国をアメリカ化するのである。彼らはそのあふれる力をもって統治をするが彼らの低い理念と教養の欠如で国家の理念を下げるのである。」(21)

彼の唱える国家活動の中心は、中産階級の精神的向上にあった。その有力手段として、彼は国民教育を位置づける。「デモクラシー」は、もともと教育制度に関する視察報告書の序文であり、その本題は教育政策の提言にあった。マシューにおける自由主義批判は、教育政策という現実的問題によって具体的に明らかになるであろう。

四　教育制度改革をめぐる論争

マシューが活躍していた一九世紀後半のイギリス社会では、デモクラシー化と並行して、近代国家建設のための「行政革命」が進展しつつあった。当時、産業化の進展とともに伝統的国家体制の無秩序な運営、非効率性に対し批判が集中し、新たな合理的理論にもとづいた新しい制度を構築しようとする改革が相次いで提唱されていた。この改革は、パトロネジなど貴族ジェントリの人的支配に代わって、近代的・客観的な行政機構を確立することをめざし、アリストクラシーからデモクラシーへの転換を象徴していた。マシューは、この改革がアリストクラシーの権益を危うくするものと認識していた。彼は、アリストクラシーの統治が個人やその社会的地位に立脚し、官職や法的な上下関係に拘束されない独立性の強いものとし、効率的な行政活動と相容れないものととらえていた(3)。当時、アリストクラシーの政治的凋落は、この「行政革命」によって具体的に進展していたといえよう。

この「行政革命」におけるベンサム主義者の影響については論争が展開されてきたが[16]、この時期、ベンサム主義と総称される功利主義、政治経済学的な議論が国家の効率化に実践的影響をもたらしたのは確実である。それは、マ

シューが批判する自由主義の立場を反映した議論であった。ダイシーが指摘するように、ベンサムは改革の理想とそのプログラムを提示したものの、実務での改革者の多くは自認したベンサム主義者ではなかった。彼らは、「実際的な妥協に長けていて、功利主義者であったが、厳密な教義を受け入れず、自由主義という名の下に、常識的ベンサム主義を受容した」者であり、「研究室の功利主義」でなく、「下院または株式取引所の功利主義」を抱いていた[17]。彼らに共通する考えとして、ダイシーは次の二つを挙げている。一つは、人間の生存の目的は幸福の達成であるということ、つまり、「効用の原則」を信じていることである。第二は、立法は科学であり、法律の目的は人間の幸福の促進であるという確信である[18]（168）。この二つの考えを基軸としながら彼らは「行政革命」を進めていった。その改革では、実践的活動の有力な指針として、政治経済学の理論が適用されていたのである。

マシューは、視学官として、とくに教育問題に関し、この「行政革命」に深い関心を持っていた。彼の教育行政における立場は、「行政革命」に対して微妙である。彼はランズダウン卿の秘書を経験し、そのパトロネジを通じて枢密院教育委員会におけるベルリオル・コレッジ出身者の集団の一員となっていた[19]。このパトロネジの集団は、当時の教育委員会における「行政革命」を担ったケイ・シャトルワースを支持していた。彼が行った改革は、初等教育機関を民衆の「教化（civilization）」を図るものとして位置づけ、民衆に新しい社会的規律と統制を与える手段と考える方向に立っていた。それは、国家による国民の精神的嚮導というマシューの主張に沿っていた。ケイの時代、マシューが務めた視学官職は、大幅な裁量を与えられ、自分の判断を認められる独立的地位を保障されていた。

この改革の方向が転機を迎えたのが、一八六二年のロバート・ロウ（一八一一-一八九二）による教育改革である。この改革はマシューが生涯においてただ一度だけ政治的闘争の渦中にその身をおいた事件として見逃すことができない。ロウの改革については、教育学・経済学の分野から詳細な分析があるが[20]、本稿でとくに注目しているのは、「行政革命」との関連である。この当時、ロウの改革の推進力となったのは、グラッドストン蔵相による緊縮財政政策であっ

た。ダイシーがいうように、この時期の財政政策の理想は、国家費用をできるだけ最低限に切り詰め、「人民の懐中で身を結ばせる」国富を出来るだけ多く残すように予算を編成することであり、グラッドストンはこの理想を忠実に実行して財政削減に取り組んだ(12)。当時の「行政革命」は、財政の制約の中で「小さな政府」をめざす性格を併せ持っていた。ロウはこの政策にそって、初等教育について補助金削減、教育機関の効率化を積極的に推進した。

マシューは、中産階級的理念を公言する代表的人物として、ロウをその著作においてしばしば取り上げる。だがロウの経歴をみると、彼が伝統的支配層の世界の中で成長したことがわかる。ロウは、一八一一年に国教会の教区牧師の次男として生まれ、ウインチェスター校、オックスフォード・ユニバーシティ・コレッジを卒業する。その後、フェローを経験し、一八四二年にバリスターの資格を得て渡豪する。そこではニューサウス・ウェイルズの立法院議員を務める。一八五〇年に帰英後、『タイムズ』紙で編集に従事し、一八五二年に自由党の庶民院議員となる。一八六八-七三年のグラッドストン内閣の蔵相を務め、一八八八年にシャールブルック子爵に叙せられ、貴族院議員となる。教育改革に携わったのは、一八五九年六月に第二次パーマストン内閣（グラッドストン蔵相）の枢密院教育委員会副議長となった時期であった。彼は本格的な義務教育を定めた一八七〇年の基礎教育法にも積極的に推進し、教育問題について大いなる関心を示していた。

彼の教育改革の中心は、初等教育に出来高払制度を導入することであった。それは、読み・書き・算術（3Rと総称）の習得に重点を置き、生徒の達成度によって補助金を各学校に交付するものであった。当時、初等教育の補助金が増大傾向にあり、ロウの政策は財政の健全化の目的から補助金削減をめざしたものであった。彼自身はこの方式を教育に健全な刺激を生み出す「自由貿易」の理念に沿ったものと自負する。

ロウの政策の基本には、彼の政治経済学に対する信奉があった。彼は、政治経済クラブ（Political Economy Club）の会員であった(21)。この会は、政治経済学についての知識交流の場として、一八二一年四月ロンドンで創立され、穀物

法廃止など自由経済原理の普及のために実務家を交えて活動していた。ロウの時代、J・S・ミル、バジョット、シジヴィック、チャドウィックなど自由主義的立場から「行政革命」を推進しようとした人物が中心を占めていた。そのことは、入閣した会員のほとんどが自由党議員であることにも表れている。

一八七六年五月三一日には、『国富論』出版一〇〇年を記念してグラッドストン議長の下で会合が開かれていた。注目すべきは、その会合の冒頭演説としてロウが「一〇〇年前の『国富論』の出版から導かれた一層重要な帰結は何か。またこの書の原理が今日なお適用されるべき主たる方向は何か」について語っていることである。そこではアダム・スミスの知的貢献を指摘する中で、図らずもロウ自身の人間観・社会観を披露している。彼はスミスの議論の精髄を次のように述べている。

「科学が評価される基準は、先見と予見である。我々が思うにアダム・スミスは、この条件をほとんど満足させている。…彼は価格の上がり下がりについて語り、貨幣の増減について話している。それによって彼が言いたいのは、それらのことばが真に意味することとは、ある環境の下でその影響を受けて人間の考えは動かされ、人間がある段階を踏んだならば、それにともなう結果が出てくるということである[22]」。

このように彼はスミスの政治経済学における科学的側面を強調し、スミスの知的貢献は「この世のすべての者に対して、その活動に関して演繹的で論証的な科学を確立したことにある」と断言する。そして彼は、政治経済学を「ある環境での人間の行動に関する仮定にもとづいて」行われ、「その仮定を経験によって証明し、真実を明らかにする」ものと規定する。

ロウによれば、独創的な思想家とはその思想が体系性を持ち、それによって人を導く者である。その意味から、ス

ミスは「政治経済学のプラトン」であり、リカードは同じく「アリストテレス」である。この「政治経済学のプラトン」に対するロウの不満は、一般化の不徹底であった。その批判は商人が自由に交易することを認める一方で、航海条例を認めていることなどスミス自身よりも、ロウの知的態度に起因するものであった。

ロウが社会的に適用されるスミスの一般原理として強調したのは、自由放任主義であった。各人は自分の利益をもっともよく判断し、自分にとって最善なことをおこなうことを通じて、彼は国家にとって最善なことをおこなう。したがって資本家に対して干渉をおこなう政府は有害であり、彼らに完全かつ絶対的な自由を認める政府が評価される。[23] ロウのスミス理解は、さらに単純化され、自身の中産階級的な理念が投影される。ロウは、スミスの富と貧困に関する理論を四つのことばに凝縮する。富をもたらす「勤労」と「倹約」、貧困の原因としての「怠惰」と「浪費」である。自由放任は、その原理が社会で正常に働くために必要であった。[24]

ロウが行った教育改革は、教育予算削減を求める世論を反映されている以上に、[25] 彼自身の政治経済学的観点が確信を持って適用されている。彼は初等教育について各人の自由に委ねるという素朴な自由放任主義は採用していないが、「教育が非効率な場合、学校が損をする」などと教育に費用対効果の観点を厳格に適用し、教育の成果を科学的に検証しようとしていた。さらにこの改革は客観的な評価を厳格に求めることで、現場の教師や視学官の裁量を拒絶し、彼らを機械的に読み・書き・算術を教える道具としてとらえる態度が顕著であった。[26] ロウの初等教育改革が、当時において猛然と反対を受けたのは、その改革の内容そのものよりもその背景にあるロウの機械的方法論であった。

マシューは、視学官として彼の部下であったが、ロウの教育改革を痛烈に批判している。それを匿名で一八六二年二月、『フレーザーズ・マガジン（Fraser's Magazine）』誌に掲載したものが「再改正教育令について（Two-Revised Code）」[27] である。同月ロウは庶民院に教育改革法案を提出しているだけに、マシューの行為は行政官として覚悟のいるものであった。

この論説で彼が最も批判しているのは、教育の効率化の下に国家が民衆教育から大幅に手を引くことである。さらに彼によれば、それは民衆教育への国家干渉に反対する中産階級の任意主義者（voluntarist）の主張に沿った政策ということである。そこでの最大の問題は、国家による民衆教育が限定されることである。マシューが法案提案者を批判するのは、民衆教育における国家の責任を、多数の者に読み・書き・算術を授けることに限定し、必要とされる最低限の教育だけを国民に授けるという政策であった。この限定的国家教育の提唱は、ミルの『自由論』にみられるように、自由主義的改革者に共通するものであった。ロウは、国家による民衆教育の役割を国民に3Rを効率的に大量供給することに限定していた。マシューは国家教育が単なる基本知識の供給だけでなく、人間形成—訓育・教養・宗教・道徳教育—にも配慮すべきものであり、旧来の政策がこの観点に立っていたことを指摘する。それは、ロウの教育改革が国教会の宗教教育を事実上、排除するという世俗的な性格を持っていることの批判もあわせ持っている。彼は、機械的な3R教育だけでなく、一般的な知的陶冶を前提とする教育が必要なことを力説し、学校を宗教的・道徳的・知的諸機能を持つ、生きた統一体として扱ってきた従来の教育の維持を訴える。

さらにマシューは、限定的な民衆教育が高度な教育を与えないことで、下層階級の自己向上の機会を制限するという問題を指摘している。彼は、この政策の背後にこれ以上のデモクラシー化に制限を加えようとする中産階級の政治意識をみている。このマシューの指摘は、ロウが第二次選挙法改正で労働者に選挙権を与えることに徹底的に反対したことで実証されていよう。[28] 中産階級の意識を強く反映する教育改革は自階級の利益に立ったものであり、国民全体の文明化に対して関心が薄いというのがマシューの批判であった。マシューがこの問題でとくに憂慮するのは、民衆教育を機械的なものに限定することによって、国家の民衆に対する精神的影響を排除することである（Super. II, p. 241）。それは彼の唱える国家による精神的指導と逆行する動きであった。この点でロウの改革は、マシューにとって自己の国家・政治観の根本にかかわるものであった。

マシューとロウの初等教育をめぐる衝突は、初等学校を「知識を授ける機関（instructing agent）」として扱うか、「教化を行う機関（civilising agent）」として扱うかの相違であった。[29] ロウの場合、それは工場労働に適した人材を供給する合理的なシステムであり、国家による初等教育は最低限の知識教育で十分であった。労働者階級がそれ以上の高い教育を受けるための支援について、彼は考えていない。また中等教育については、国家が介入すべきでないと考えていた。それに対し、マシューは、初等教育を「集団的で共同体としての統一性を持った国民」の形成のために不可欠なものであるとし、国民を洗練させる内容が必要であると考える。

実のところ、マシューにおいて教育問題に対する関心の中心は、中等教育以上にあった。彼は初等教育に関する論争を国民教育全体に対する橋頭堡と考えていた。その考えの一端は、一八六二年三月一二日付の母メアリー書簡で次のようにあらわれている。

> 「われわれがこうした［小学校が「教化を行う機関」である］見解を今回の議論の中で確証できるならば、国家による教育に関する将来の一大拠点が確保されたことになるでしょう。私は、国家による教育の運営がやがて中等教育や高等段階の学校にまで拡大していくことを期待するのであります。[30]」

マシューは初等教育の調査で大陸諸国を訪れたが、彼は、視察任務の対象である初等教育でなく、むしろ国家が主導する中等教育を重視した。初等教育に関する視察報告書の序文にあたる「デモクラシー」では、初等教育よりも中産階級の中等教育を国家によっておこなうことを強調している。その後の教育関係の著作も『フランスのイートン』、『大陸諸国の学校と大学』など大陸諸国の先例を紹介しながら、国家による中等教育の必要性を繰り返し主張している。

彼がこれらの著作で繰り返し強調しているのは、イギリスにおける中産階級が最悪の教育を受けているという認識

である。中産階級の「俗物」性は、「任意主義」の名の下に彼らの教育を国家の干渉から自由にし、その物質主義とセクト主義を再生産することによって維持される。彼らには、パブリック・スクールでおこなわれる人格教育—卓越した精神的態度、指導力の養成など—の恩恵にあずかっていない。

マシューは、フランスにおけるリセとコレージュを中等教育の模範としている。それらは、中産階級に良質な教育を国家によっておこなう機関である。現在、イギリスにおいて良質な中等教育は、貴族ジェントリ階級中心のパブリック・スクールに限定されているが、国家が中等教育に乗り出すことによって、安価で良質な教育を中産階級に供給できることを彼は期待している。国家が運営する中等教育機関は、中産階級を洗練し、高い理念をもたせる具体的制度としての役割を持つであろう。彼は、デモクラシー社会で必要な中産階級の洗練化が、国家による中等教育によって、実現されることを期待している。

さらにその議論は、国家によって運営される大学という主張に発展していく。特権階級の教育機関である大学を国家の手によって開かれたものとすることで、国民全体の教養を向上させるのである。それは、高き精神を持つデモクラシー社会を実現する、国家による制度的保障を完全にする試みである。[31]

マシューは、このような教育機関の担い手である教育者の人格的役割に高い期待を抱いている。一八八六年一一月一二日に行われた視学官を退官するにあたっての演説で彼は、デモクラシーの時代において、大衆のモラルと徳を形成する教育者の影響力に期待し、彼らの活動によってバークのいう「イギリス民衆の伝統的で生得のものといえる誠実性と敬虔」が維持されることを述べている。[32] 彼は父トマスと同様に、コールリッジ的な国家聖職者（clerisy）像を教育者としての職務に重ね合わせていた。

以上のようなマシューの教育論は、当時の自由主義的な世論において冷ややかに受け止められた。一八六一年七月の『エディンバラ・レヴュー（Edinburgh Review）』では、『フランスにおける民衆教育』を他の教育改革論と比較

する中で次のような厳しい評価が下されている。

「フランスの民衆教育に関する彼の報告書は、全体として大陸諸国の行政における官僚精神を是認しており、それは自由なイギリス人の精神にとって苦痛と良心の呵責をもたらすほどである。この国の公共精神が活気をなくし、上流階級が彼らの義務と真の利益に鈍感になった結果（アーノルド氏はそうなりつつあると思っているようである）、国家の役人に我々の重要な任務を委ね、社会悪の万能薬を国家行政に求めるようなことを神は許さない。それは、官僚制度が精神にもたらした影響の悲しむべき結果であり、アーノルド氏の広くて自由な気質は、判断が狭まってこの奴隷的原理に陥っている。[33]」

『エディンバラ・レヴュー』の論者の関心は、民衆教育における補助金支出の削減方法であり、大陸並の国家教育の充実を訴えるマシューの議論には批判的であった。さらにそこでは、その議論を彼が所属する教育委員会を代弁する党派的主張と示唆している。この立場は、ロウが教育改革の反対者を既得権益を擁護する党派的利益の主張者として一蹴したことに共通している。

また『コーンヒル・マガジン（Cornhill Magazine）』一八六四年一〇月号の「イギリスの中産階級教育」という論文では、マシューの『フランスのイートン』を評して、イギリスの国民は「厳格で画一的な規律が、政府機関と固く結びついているような考えには我慢できない」し、「ある年齢のすべての少年が同じ方法でまったく同じことを学ぶようなこと」を聞いたことがないと批判する。[34]

中産階級の教育についての世論は、ロウの『中産階級と初等教育』（一八六八年）にみられるように、中等教育は不十分であることを認めながらも、国家助成でなく自身の手によってなされるべきとする任意主義が一般的であった。[35]その教育は古典的教育を中心としたパブリック・スクールの人格教育でなく、科学・語学を中心とした新しい実務教育であった。『自由論』においてミルが国家教育に対して伝統的エリートの精神支配の手段となる危険性を指摘したよ

うに、ロウの立場は、任意主義の枠内で中産階級的価値観の維持を強く意識し、マシューの唱えるパブリック・スクール的教育を排除することをめざしていた。[36] ただし、マシューにせよ、ロウにせよ、デモクラシー化の中で大衆による無秩序状態を懸念しており、彼らを直接指導する立場の中産階級の資質を改善しようとする方向は一致していた。[37] 両者の相違は、現在の中産階級的価値観をどの程度積極的に評価するかであった。

イギリスの民衆教育は、結局、マシューの思惑とは異なり、一八七〇年の基礎教育法にみられるように任意主義原理が採用され続けることになる。他方で中等教育は、中産階級の有力層自体が自己の子弟にパブリック・スクール教育を受けさせる行動をとることで、マシューが危惧した国家の指導層における中産階級的原理の浸透は曲がりなりにも回避できたといえよう。ただ指導層と一般民衆、さらにまた独自の価値観を維持し続けようとする中産階級との精神的世界の相違は相変わらず残っていくことになる。

五　マシューの「マイアル主義」批判

マシューは中産階級の自由主義の特徴として、セクト主義的傾向を挙げている。彼はそれを「マイアル主義」と呼んでいる。このセクト主義は、ディセンターを多く抱える中産階級の知的世界を支配し、「ミル主義」とあいまって国家活動に対する否定的な態度を彼らにとらせていた。マシューが指摘するように任意主義の立場からロウの改革を積極的に推進していたのは、エドワード・マイアル(一八〇九-一八八一)をはじめとするディセンターであった。

このセクト主義の問題は、一八六〇年代後半、政治問題として浮上してくる。それは、グラッドストンによって進められたアイルランド国教会廃止の動きである。一八六八年の選挙で自由党は、アイルランド国教会廃止と教会税廃止を訴え、ディセンターの熱心な支持を集めた。その後の第一次グラッドストン内閣で、「アイルランド国教会廃止法

案」が庶民院に提出された。マシューが『教養と無秩序』の中で、全体の内容からいって不自然なほどこれに執拗に反対を表明しているように、彼自身にとっても、また当時の自由党における伝統的勢力（「ホイッグ・リベラル」）にとっても重要な政治的争点であった。

グラッドストン内閣によるアイルランド国教会解体は、マシューによれば、教会税負担の不平等性を口実にして国教会解体を企てるディセンターの意向にそった政策であった。少数者の教会である国教会が、アイルランド人のすべての教会財産を独占することは、理性と正義に反することであると、彼は認めながらも、その解決策は教会税を各教会に分配することであると主張する。国教会解体をめざすことは、ディセンターの党派的主張であり、自由党の政策は党派的利益に立っている点で批判される。

マシューによる「マイアル主義」の批判の基本は、それが持つ階級性である。彼によれば、プロテスタント・ディセンターに最も欠けているのは十分かつ調和のある洗練性であり、そのことが彼らの度量の狭さや一面性、不完全性をもたらしている。マシューは、これらの特徴を「偏狭性（provinciality）」と総称し、「全体性（totality）」の欠如としている（193）。すなわち、プロテスタント・ディセンターには独立と自由の精神はあるが、イギリス国民全体を代表する精神に欠け、彼らは自階級の理念に固執する態度を維持し続けているという。

マシューは、国教会の「全体性」とプロテスタント・ディセンターの「偏狭性」を対峙させ、前者の優越を主張する。国教会に属するかそれによって訓練されることで、人々が「全体性」、すなわち十分で調和のとれた完全性に近づき、この世での一般的な完成が促される。そのことは、国教会が著名な人物を輩出してきた歴史に照らして明らかであるという。彼は、ディセンターの最大の弊害を「国民生活の主流と絶縁している」ことに求める。国教会は、イギリス国民における歴史と伝統を踏まえた精神的権威を持ち、個人的な思考にともなう独断を抑止し、教養を求める方向へと向かわせるが、ディセンターは自分の宗教的経験に固執し、自己のセクト的教会の中で「偏狭性」を強めていく。

このセクト主義が支配的となった社会の実例として、マシューはアメリカをあげる。彼は、ルナンによる次のアメリカ評を支持する。

「民衆の健全な教育は、ある階級の高い教養の影響による。合衆国のように真摯で高級な教育がなくて、相当な民衆教育をつくりだした国民は、今後長らく、この欠点の報いとして彼らは凡庸な知識しかもたず、習慣は野卑なものとなり、精神は皮相的になり、一般的な知性を欠くことになる。」(197)

マシューは精神的なことがらと教養、そして「全体性」においてアメリカがイギリスに劣っていると断言する(199)。その原因として、マシューはアメリカでは「俗物」である中産階級が国民の大部分を占め、彼らのセクト主義が知的生活を支配していることをあげる。アメリカにおいて人間の精神的活動が発揮されるのは、偏狭な宗教的側面に限られると彼は評する(199)。

マシューは、アメリカ国民が国教会を持たないために、偉大で明るい前途を持つ国民であるにもかかわらず、国民全体が「偏狭性」に陥っているとする。彼がイギリスにおけるプロテスタント・ディセンターに求めるのは、この「偏狭性」の根絶である(201)。そのために必要なのが「国民生活の主流と接触する」ことである。それは、包括主義的であるが、広教会的なものでなく、「全体性」を持ち、国民が「完全に向かうあらゆる進歩」をめざす組織としての国教会との交わりである。この国教会は、「国家はすべての市民による宗教を持ち、その市民によるいかなる狂信をも排除する」(154)という原理に立っている。それは、「どのような教権制度にもみられないほどの精神の大らかさと活動とを壮大で国民的な礼拝方式に結合させる理想」(Super, V. p.522)に立つ国民的教会である。マシューにおいては、教育とともに国民の精神的向上をめざす国家活動の一つとして、国教会が位置づけられていた。[38]

マシューはこのような観点から、プロテスタント・ディセンターに配慮するグラッドストンの政策を批判する。国教会の解体によって、イギリスの宗教は自由かつ独立な「偏狭性」があい争い、国民を精神的に高い理念に統合することが不可能となる。マシューは、アイルランド国教会廃止を端緒とするグラッドストンの自由主義的改革に批判を強め、一八八六年の小論「自由主義のどん底（The Nadir of Liberalism）」では「行動の党」である自由党の「賢明でない危険な変化」に対して、「安定と永続の党」である保守党の選挙での勝利に期待を表明している。そのマシューの立場は、アイルランド国教会廃止問題を契機にバーク以来のホイッグ・リベラルから新たな支持層に自由党の重点が移りつつあった動きに対応していたといえよう。(39)

おわりに

マシューは、一九世紀を「懐疑と論争と狂気と不安に満ちた鉄の時代」と自ら述べているように、新たな時代変化に直面した不確実な時代に生きていた。そうした変化の中心として彼が注目したのが、デモクラシーであった。「発展の時代」にあってデモクラシーは不可避の社会動向である。そしてイギリスは、この政治的動向に対応した社会形成に遅れをとっているという認識が彼の政治意識の根底にあった。彼は、デモクラシーが持つ社会変革のエネルギーと集団的能力を評価していた。さらに、すぐれた個人の能力を評価するものの、「発展の時代」には集団活動が孤立した個人の努力よりも有効であることを認識していた。彼の考えでは、この集団的能力をいかんなく発揮させ、国民を偉大にし、複雑な問題に対処するには、国家の活動を用いることが必要であった（24）。

マシューの政治的議論は、このデモクラシー化の時代において、イギリスが衰退しているという危惧から展開されている。それを最もよく語ってくれるのは、一八六五年一一月一一日妹フランシス宛に書き送った次のことばであろ

う。

「私が確信しているのは、イギリスがすべての点において果てしなく衰え、かつて偉大なオランダがたどったような衰退に陥るという現実の、ほとんど差し迫った危機であります。それは、私が理念と呼ぶものが欠如しているからであり、世界がどのように動き、また動くべきかを認識しておらず、それに対処することがないからです。この確信は私につきまとい、時には意気消沈させることもあります。私はこの変化を座視することはできません。それは事態を悪化させることにつながるからです。自分ができることがある限り、いろいろな方法でこの変化をさまたげていきたいのです。ひとつまたひとつと方策をとっていく中で、うまくいかないで賢明でない衝突を招くに違いありません。結局は失敗に終わるかも知れません。しかし、私は試みなくてはなりません。時世に勝つには、いろいろな方向を見ていくしかないのです。[40]」

ここからうかがえるのは、マシューにおけるデモクラシー社会の形成原理の模索が、イギリスの現状に対する危機意識に発しているということである。この意識は晩年に至るまで続いている。[41]

彼のこの危機意識の根底には、高尚な理念のないデモクラシー社会は衰退するとの確信があった。それを防ぐものとして、国家の活動に期待する。そこには、国家を有機体的なものとして国民の理念を体現するものとみなす視点があった。彼は『フランスのイートン』で国家における市民の関係を協同事業（partnership）と評する。それは、バークのいう「すべての学問、すべての技芸、すべての徳、すべての完全性についての協同事業」である。「偉大で最終の共同の計画に向けて、市民はその結びつきが与え得る支援を利用する」(300)のである。彼はバークのことば、「政府とは人間の必要に応じるべく人間の智慧が考え出した装置である」、「人間は、これらの必要をこの智慧によって実現されることを主張する権利がある」を引用し、高き理念を維持するための国家による教育を支持する(302)。それは、デモクラシー化の中で、国家が統一的有機体であり続けるための活動でもあった。このような国家観は、中産階級的

な自由主義と対極にある。

一九世紀半ばに中産階級的価値観が実践的な原理として社会改革に適用されるとともに、マシューの思想はそれに対抗すべく政策の次元にまで展開していく。それは、イギリスの政治的伝統の実践知を支え続けてきた知的態度といってよい。マシューは、デモクラシー社会をあくまでも有機体的国家の展開として位置づけ、社会を機械的・科学的に理解することを個別の問題を通じて拒否してきた。彼における教養とは、国家を精神的統合の中心とする伝統的国家観の基盤に立っていたといえよう。

本稿は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

注

(1) イギリス教育史の観点から、マシューの報告書を分析したものとして、次の文献を参照。Walcott, F, *The Origins of Culture and Anarchy* (Toronto, 1970), Connell .W. F., *The Educational Thought and Influence of Matthew Arnold* (1950, New York)

(2) レイモンド・ウイリアムズ『文化と社会』(ミネルヴァ書房、一九六九年) 九八頁。

(3) 政治思想史からのわが国のマシュー研究について、次の文献を参照。小田川大典「近代・教養・国家—マシュー・アーノルドにおける自我と政治—」(一)—(三)『六甲台論集』第四〇巻三号—第四一巻二号(一九九三—四年)、「アーノルド『教養と無秩序』の生成と構造」『イギリス哲学研究』一八号(一九九五年)、「アーノルドとピューリタニズム」『岡山大学法学会雑誌』第四八巻三・四号(一九九九年)若松繁信「マシュー・アーノルドのカルチュア観(上)(下)」「マシュー・アーノルドの非国教徒中産階級論」『北九州大学外国語学部紀要』八二—八四号(一九九四—一九九五年)

(4) バーカー『イギリス政治思想Ⅳ』(岩波書店、一九五四年)一七一—一七二頁。

(5) トリリングの次の研究は、社会・政治的視点をとり入れた分析で画期的と一般に評されるが、同時代の政治状況に対するマシューの意識よりも、トリリング自身の政治分析に依拠している。とくに『教養と無秩序』分析については、ルソーの立法者とマシューの「最善の自我」の権力を重ね合わせるなどその傾向が顕著である。Trilling. L. *Matthew Arnold* (New York, 1954) p.

283.

(6) たとえば代表作の「ドーバー海岸（Dover Beach）」を評して、評論家の吉田健一はマシューが「人智の発達が神の否定、あるいは喪失にまで進展した近代の行き詰まりを最初に知った」英国人の一人であると指摘する。吉田健一『英国の文学』（岩波文庫、一九九四年）、二二九頁。

(7) 同様の指摘は、『教養と無秩序』の第二章にもみられる（90）。

(8) マシューにおける各国民の精神性の比較は早い段階からあらわれている。一八四八年三月一〇日付の母メアリー宛の書簡では、フランスが「政治的」にヨーロッパの先頭にあることを述べ、「〈理念によって動かされる大衆〉の知性は、ロシアの農奴にも比すべきイギリスの〈分別のない大衆〉より、はるかに政治的に優れたものにしている。同時に彼らは豊かなアメリカの大衆のような不寛容な〈醜悪さ〉で教育を受けた者の世界を脅かすことはない。」Lang. C. Y. ed. *The Letters of Matthew Arnold (Virginia, 1997-2001)*. 1. p.95.（以下、*Letters* と略。）

(9) 一八六五年一一月二五日母メアリー宛書簡で、現在本当に行うべきことは、選挙法改正法案や選挙権拡大の外的な制度を通じてなすものとは思わないと言及している。*Letters*. 2, p.477.

(10) A・V・ダイシー『法律と世論』清水金二郎訳　菊池勇夫監修（法律文化社、一九七二年）九六頁。

(11) 一八六〇年七月三〇日付ハリエット・マーティノー宛書簡は、このようなマシューの問題認識を端的に裏づけるものとなるであろう。彼はこの書簡で次のように述べている。

「私が信ずるに、我々は大きな変動の前夜にいるのです。国民の中の少数が統治に参加する方法の方が統治をうまくおこなえるという理論は、デモクラシーが支配的となった時代にはもはや役に立たないものです。少なくとも私の知っている限り、デモクラシーは最良の知性と徳をその中に組み合わせて持ち、それによって導かれることがなければ、本当に成功はしないものです。もっとも貴族的・寡頭的な政府は、そうでなくともうまくいくようですが。アメリカのデモクラシーは、ワシントンの下で、アテナイのデモクラシーはペリクレスの下にある以外では決して偉大なものでなかった。」（*Letters*. 2, pp.14-15.）

(12) この「異邦人」概念は、コールリッジ以来の「国家聖職者（clerisy）」の伝統に立つ知的エリートの伝統に立ちながらも、それは少数者に限定されるべきものではない。各階級で見出されるものであり、国家においてつくりだすべきものであった。マシューの実践的な政治に対する関心が教育と国教会のあり方に向かったのはその方向に対応したものであった。

(13) マシューは『友情の花園』で自由思想家を「マイアル主義」と「ミル主義」の二つの結合といっている。Super. V, p.46

(14) 一八五九年六月二七日の母メアリー宛書簡でマシューはミルの『自由論』について、「熟読に値する書物」であり、その寛容に

関する記述を「冷静で嫌味にならない叙述」を評価している。*Letters*. 1, p.468.その後、七月二日に姉ジェーンにも『自由論』を推奨している。*Letters*. 1, p.471.

だが思想家としてマシューが、ミルに共感を持たなかったことは、一八六六年のハイド・パーク騒擾事件に関する言及にあらわれている。この事件は、ミルが自伝で労働者を説得したと誇らしげに語っている。『ミル自伝』(岩波書店、一九六〇年)二五〇頁。マシューは一八六八年一月二〇日付スペンデイング宛書簡で、この時のミルの様子を評して、「彼は私の興味を引くことはありませんでした。それは偉大な知性の能力を持ちながらも、彼が自分について思慮をほとんど持っていないように思われるからです。この時の彼の姿は、その思考の仕方をはっきりさせるものでした。」*Letters*. 3, p.222.ハイド・パーク事件は『教養と無秩序』で無秩序の具体例として詳細に語られるなど彼にとって印象深い事件であった。それはこの事件の平穏性を語るミルとは対照的である。

(15) 代表的な例として、J・S・ミルの「文明論(Civilization)」(一八三六年)」山下重一訳『J・S・ミル初期著作集・三』(一九八〇年、御茶の水書房)を参照。ここでミルは文明を未開状態の反対概念として用い、精神的なものよりも社会的発展を重視している。その結果、ミルにおいてデモクラシーは文明化の所産であり、デモクラシーの文明化というマシューの問いとは異なるアプローチをしている。

(16) 「行政革命」に関する論争を解説したものとして岡田与好「自由放任主義と社会改革—「一九世紀行政革命」論争に寄せて—」『社会科学研究』二七-四、一九七六年参照。この「行政革命」論争はダイシーにおける一九世紀の三区分(一八〇〇-一八三〇年「旧トーリー主義すなわち立法休止の時代」、一八三五-一八七〇年「ベンサム主義すなわち個人主義の時代」、一八六五-一九〇〇年「団体主義の時代」)をめぐる評価を基本としている。

(17) ダイシー、前掲書、一八九頁。

(18) 前掲書、一六八頁。

(19) ベルリオル出身者は、結束を維持し、他の部門の知識人と密接な関係を持っていた。彼らは、実務的な行政官というより知的ディレンタント的側面を持っていた。コレッジのコモンルームにおける集まりと同様に学者、詩人、哲学者、音楽家として、教育を除く森羅万象について議論を行い、上司に対し、恐れを抱かなかったといわれる。Richard Johnson, Administrators in education before 1870: patronage, social position and role, in Gillian Sutherland(ed), *Studies in the Growth of Nineteenth-century Government* (London, 1972) pp.128-129.

(20) ロウの教育政策については次の文献を参照。Sylvester. D. W, *Robert Lowe and Education* (Cambridge, 1974). 岡田与好「自

由貿易と教育改革―ロバート・ロウのばあい―」『自由経済の思想』（東京大学出版会、一九七九）、Duke. C. Robert Lowe-A Reappraisal, *British Journal of Educational Studies*. vol.14. no.1. 大田直子「イギリス教育行政制度成立史」（東京大学出版会、一九九二）四三-七五頁。伝記については、次の文献を参照。Witner J. *Robert Lowe* (Toronto, 1976)

(21) 政治経済学クラブの活動については、次の文献を参照。藤塚知義『経済学クラブ―イギリス経済学の展開』（ミネルヴァ書房、一九七三年）

(22) Political Economy Club (ed), *Revised Report on The Proceedings at the Dinner of 31st May, 1876, Held in Celebration of The Hundredth Year of the Publication of the Wealth of Nations* (London, 1876), pp.7-8.

(23) *Ibid.*, p.13.

(24) *Ibid.*, p.13.

(25) ロウの教育改革は、一八五八年「イングランドにおける民衆教育の現状を調査し、民衆の全階級に安価で健全な教育を拡大するために、もし何らかの方策が必要であるとすれば、いかなる方策が必要であるかを考え、報告すること」が論議されたニューカッスル委員会（一八五八年設立）の方向に沿ったものであった。マシューの『フランスにおける民衆教育』もこの委員会における大陸視察報告書であった。

(26) Sylvester, p.224.

(27) この論文の翻訳について、小林虎五郎訳『再改訂法典』（東洋館出版社、二〇〇〇年）参照。この文献は、論説執筆の経緯、マシューのプロフィールなど詳細な解説を含んでいる。

(28) 労働者階級の政治進出に反対した政治家としてのロウ像について、A・ブリッグス『ヴィクトリア朝の人びと』（ミネルヴァ書房、一九八八年）第九章参照。

(29) 一八六二年三月五日付の母メアリー宛書簡で、彼は自分の基本的主張を「国家が初等学校に対して〈知識を授ける機関〉である以上に〈教化を行う機関〉として関心を持つことである」としている。彼は保守党のダービー卿やディズレイリに法案批判の担い手として期待しており、彼らに「教化をする機関」として初等学校を認識させることで、新法案を阻止しようと考えていた。*Letters*. 2. p.125.

(30) *Letters*. 2. p.125.

(31) 『大陸の学校と大学』（一八六八年）ではイタリアの著作家による次のことばを引用している。「みなが理解し、意識すべきことは、学問に関する良き制度と国民の高度な知性の発展が、国家権力と、国民における真の秩序正しい自由の最も本質的な基礎であ

る、ということである」(Super, IV. p.182)

(32) Super,XI. p.378-379.

(33) *Edinburgh Review*, 1864, July. p.6.

(34) *Middle Class Education in England. The Cornhill Magazine* 1984, Oct, p.410.

(35) Lowe, R, *Middle Class and Primary Education* (London, 1868). p.17-18.

(36) このことは、ロウの次のことばからでも明らかであろう。「彼ら［中産階級］は他の国の同じ階級に比べて教養が欠けているし、洗練されていない。彼らは高い精神が欠けているし、金銭が人生のすべてでその目的ではないと教えられていない。また高い道徳も持っていないし、名誉の感覚もない…だが、これだけは言いたい。中産階級の者にその子弟を上流階級が与えてきた教育を受けさせることを勧めることはできない。」Lowe, p.18.ロウのこの発言は度重なるマシューの批判を受けてなされた演説である。Witner, p.166.

ロウはまた『フランスのイートン』を読み、イギリス版リセは不可能であり、選挙権を与えられた貧しい者に対して税金を裕福な者の教育に払うことを期待すべきでないと考えていた。Witner, p.162.

(37) ロウもまたイギリス社会のアメリカ化を危惧していた。ロウの視点は、選挙法改正によって大衆が政治参加することの嫌悪からであった。Witner, p.133-134.ブリッグス、三一九頁。

(38) マシューは父トマスと同様、エラストゥス主義的な国教会観に立っている。そのことから、国家による教育は国教会と連動して行うものと考える。彼は、ドグマ的教育を行う国教会聖職者に対して批判的であったが、教育と宗教を切り離す世俗主義的教育改革には断固として反対していた。マシューにおける具体的な宗教教育の議論について、次の文献を参照。Fitch. J, *Thomas and Matthew Arnold and their Influence on English Education* (New York, 1897) pp.194-915.

(39) パリーはこの政治問題をきっかけに、国教会を支持し、宗教教育を擁護するアングリカンの自由党支持者が保守党支持に向かったことを指摘している。さらにグラッドストンの改革が進展する80年代になると、ホイッグ・リベラルの離反は拡大する。Parry. J. P, *Democracy and Religion;Gladstone and the Liberal Party, 1867-1875* (Cambridge, 1986). pp.148-149.

(40) *Letters*. 2, p.472.

(41) 一八八五年の『自由主義のどん底』においても、マシューはイギリスの比重と影響力の衰退を訴えており（Super. IX. p.56)、この問題は、生涯にわたって彼の念頭にあったものと推測される。